

Chapter



第一章

日本における保育の課題と展望

- 1-1 日本における保育の課題と展望
- 1-2 問題提起～日本におけるECECの課題～
調査データから見る日本の保育
総合討論

日本における保育の課題と展望

秋田喜代美

Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授



東京大学大学院教育学研究科教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は保育学、教育心理学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会会長、World Association of Lesson Studies Vice President、日本発達心理学会理事等を務める。日本教育心理学会城戸研究奨励賞、日本読書学会読書科学研究奨励賞、(財)発達科学研究奨励賞等を受賞。著作に、『保育のおもむき』（ひかりのくに）、『学びの心理学』（左右社）、『保育の心理学』（全国社会福祉協議会）など多数。

● 今、日本の幼児教育には何が求められているか

今、日本の幼児教育に必要なだと私が考えていることは、大きく3点ある。1つ目は、「21世紀の社会のあり方を見据えながら、すべての子どもたちが乳幼児期、子ども時代、そしてその後の人生において、幸せな生活が送れるように育てていく」ということ。21世紀は「知識基盤社会」といわれており、この点が鍵になるのではないかと考えている。

2つ目は、「格差なく、落差なく、段差なく」ということ。「格差」とは、家庭経済格差、地域格差、園間格差のことである。「落差なく」とは、特別な支援の必要な子どもをはじめ、多様なニーズをもつ子どもに対応する必要があるということである。加えて、体力低下や直接体験の減少が指摘さ

れる中、子どもの育ちに必要ないずれの領域も落とすことなく、バランス良く、すべての子どものニーズに応じた経験を保証することが大切である。また「段差なく」とは、子どもの成長とともに、家庭から園へ、園から学校へ、そして地域へと円滑に移行できるようにということである。

3つ目は、「幼児教育の質向上サイクルの過程を保証する」こと。幼児教育の質の確保については行政でも議論されているが、各園が質の向上サイクルの過程を保証して、より良く変わっていく仕組みをつくるのが大切だと、私は考えている。

● 日本の幼児教育の課題は質保証のエビデンスと財源

日本の幼児教育は質が高い半面、課題もあれば、私は考えている。

例えば、幼児教育の質が本当に子どもの幸せな人生を保障するかということについて、東アジアやアメリカ、ヨーロッパの国々がエビデンスを既に出しているのに対して、日本はエビデンスが出せていないという課題がある。幼稚園では自己評価が義務づけられ、保育所でも第三者評価がなされているが、それが質を向上させるサイクルに貢献し、質を保障しているかどうかという点に関しての事実やエビデンスがないのである。

格差は増大しているのに、財源が不足しているという課題もある。多様なニーズに応じた保育もまだ十分だとは言えないだろう。さらに、段差解消に向けて保幼小連携の取り組みは始まっているものの、人口規模の小さい自治体ほど予算が不十分で、地域格差も生まれている。

今回は、財源と質保証のエビデンスという2つの点に関して、海外の現状を紹介しながら、我々がこれから課題解決に向けて取り組むべきことを考えていきたい。

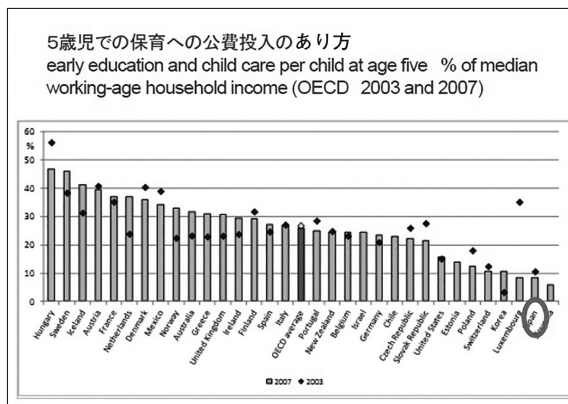
● 乳幼児教育への公的投資が少ない

OECD（経済協力開発機構）は、教育のイノベーション分野として、幼児教育と高等教育を挙げている。図①は、OECDによる「5歳児での保育への公費投入のあり方」についての国際比較のグラフだが、日本は下から2番目と、非常に公費が少ないことがわかる。また、日本の相対的貧困率は、働く一人親世帯で60%程度と、OECDの中で最も高く、子どもの貧困の発生や、貧困が世代を超えて受け継がれるリスクが指摘されている。

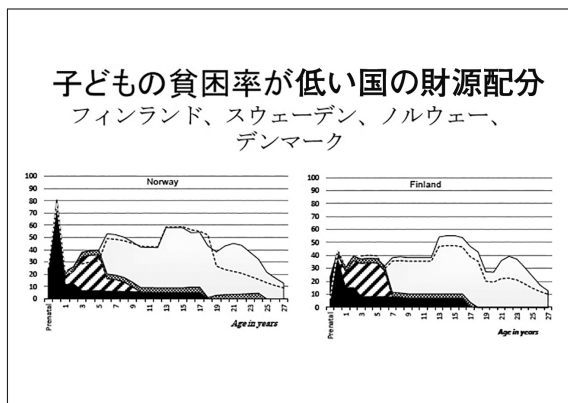
図②は、子どもの貧困率が低い国の財源配分を示したもので、乳幼児に対する財源が手厚いことがわかる。日本は、義務教育段階の国庫負担は高いのに対し、乳幼児の部分が非常に低い（図③参照）。今後、少子高齢化社会が進む中で、予算がさらに削減される危険性もある。

このような状況の中で重要なのは、幼児教育の重要性を、関係者のみではなく、広く社会一般に理解してもらうように働きかけることだ。そのためには、まず、幼児教育の質を上げたり、十分な予算を配分したりすることが必要である。そして、子どものその後の成長にかかわるというエビデンスを収集しなければならないだろう。

また、財源が少ないのであれば、効率的に幼児期の教育を行えるような制度体制に



図① 5歳児での保育への公費投入のあり方



図② 子どもの貧困率が低い国の財源配分

転換していくことも重要となる。その効率的制度運営として考えられるのが、幼保一体化だ。

海外では幼保一体化が進んでいる。東アジアでは、例えば台湾は、カリキュラム、資格、所管行政が一元化され、シンガポールでもカリキュラム、制度、所管行政の一元化が実現した。韓国では、所管行政は一元化されていないが、満5歳の子どもに対する共通カリキュラムを導入し、3～4歳児についても同様の共通カリキュラムが導入され、所得制限はあるが、無償化も実現している。欧州では二元化が残っている国もあるが、その場合は基本的に、乳児と幼児で二元化されているのが特徴である。

日本では、幼保連携型の認定こども園保育要領（仮称）策定に関する議論が先日始ま

り、厚生労働省と文部科学省が一緒にカリキュラムを作成するという試みが動き始めた。資格に関しては、幼保連携型認定こども園では、「保育教諭」という新しい職名が誕生してはいる。だが、今のところは保育士と幼稚園教諭の両方の資格が必要になるという課題が残っている。財源、施設、行政制度などの点でもまだまだ課題はあり、給付や課程は一体になっても乳幼児をめぐる施設制度の一元化実現への道のりははるかに遠いという印象を私は抱いている。

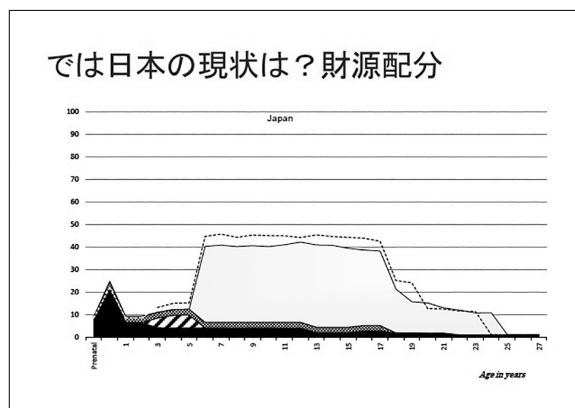
● 幼児教育の質を評価するための指標をつくるのが重要

幼児教育の質の保証について、国家レベルとして何をすべきかを、グローバルな動きを見ながら考えてみよう。

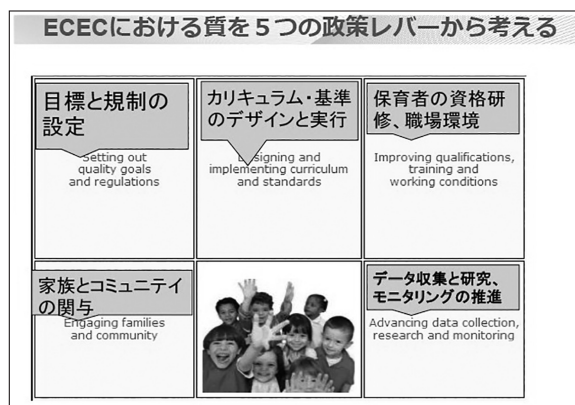
OECDは2012年に出した報告書「Starting StrongⅢ：幼児教育・保育のための質の高い方策」で、早期に力強い一歩を踏み出すことが重要だと述べており、子どもの学習と発達の向上には品質基準が不可欠だと指摘している。

そこでは、「1：目標と規制の設定」「2：カリキュラム・基準のデザインと実行」「3：保育者の資格研修、職場環境」「4：家族とコミュニティの関与」「5：データ収集と研究、モニタリングの推進」の5つの政策手段が紹介されている。—— 図④参照

中でも、「5：データ収集と研究、モニタリングの推進」に関しては、各国ともはまだ「弱い」という認識が強く、OECDの「ECEC（Early Childhood Education and Care）ネットワーク」と呼ばれる先進諸国のネットワークでは、今後この点を強化し、国際的に幼



図③ では日本の現状は？ 財源配分



図④ ECECにおける質を5つの政策レバーから考える

児教育の質を評価できるような指標をつくらうとする動きが始まっている。

— 図⑤参照

指標には、「どのような保育政策を実施するか」「何人の保育グループなのか」「学級定数はいくつなのか」といったインプット指標と、こうしたインプット指標によって、子どもの育ちや保護者の満足度はどう変化したのかということ測る「アウトプット指標」があり、この2つの指標の関連を分析し、活用していくことが幼児教育の質を上げることに繋がるとしている。

このような質を保証するための指標については、EUやIEA（国際教育到達度評価学会）、ユネスコなどで試作されているほか、イギリスのネットワークでは欧州各国を横断した研究、カナダやオランダ、ノルウェー、デンマークなどでは国家規模での研究が行われている。

● 各国の評価指標について 具体例を紹介

具体的にどのような指標づくりが行われているのかを見ていきたい。

■ Eurydice Network (EU)

欧州36か国が加盟し、ヨーロッパの教育政策やシステムなどについて情報提供や議論を行うための組織、Eurydice Networkでは、幼児教育の分野において、産休や育休の長さ、財政支援、就園率、クラスのサイズ、保育者に対する子どもの比率、カリキュラムなどのデータベースを作成している。各国が教育政策を改定したり、教育改革をしたりする時に役立てるために、2014年に比較データが出せるように進められている。

データに基づく質モニタリング

- これからの2年間 OECD ECECネットワークの仕事
2013-14、2015-16
国際的に保育の質の評価ができる指標や検討
インプット指標 と アウトカム指標
- この背景にはグローバル化の中での動きがある
欧州連合、IEA、ユネスコ、他にも英国発のネットワーク
各国が保育の質に関する縦断研究を実施している
カナダ、オランダ、ノルウェー、デンマークの例

図⑥ データに基づくモニタリング

■ オーストラリア

オーストラリアでは、さまざまな地域コミュニティの幼児が、どのように発達しているかの相対的な動向を明らかにするための指標、AEDI (Australian Early Developmental Index) がある。感情・情動の発達、言語、運動・身体能力の発達、社会的対人能力、コミュニケーション能力という5つの領域で発達成果を報告するもので、オーストラリア政府は総額5～6億円を投じ、3年ごとにデータを収集している。データ収集方法は、ウェブデータ入力システム上のチェックリストについて、教師の知識とクラスでの観察に基づき、1人ひとりの子どものデータを入力していく形である。

これまで26万人（全体の97.5%）のデータが収集され、オーストラリアの子どもの大半はAEDIのどの分野においても健全に発達していることがわかった。ただし、1つ、あるいはいくつかの分野においては23.6%の子どもは発達的に弱い点が見いだされた。また、発達的な遅れは経済社会的地位の低さに基づくものではないことも明らかになった。

こうした情報は、園だけではなく、地方自治体、政府組織、都市計画、健康福祉サ

ービスなど、多方面の組織から提供されている。そして、そのデータを子ども同士の比較に使うのではなく、1人の子どもの生涯幸せに過ごすためには、どのような政策を立てるべきかを、州レベルやコミュニティレベルで検討しているのである。

■ノルウェー

ノルウェーには、乳児を含めた「幼稚園」があり、学校教育機関と位置づけられている。国として「全ての幼稚園が公平で質の高い保育を保証する」「子どもたちが学びと育つ場としての幼稚園の強化」「全ての子どもが幼稚園に参加する」という目標を設定している。これまで、園の総数や就園率、労働供給と労働条件、法令・規制のコンプライアンス（遵守）、ECEC施設の質については定期的にモニタリングしてきており、保育者満足度調査や、カリキュラムの実施具合は、都度行われてきた。また、自治体においては監査制度、アンケート調査などにより、法令遵守や保護者支援、施設（環境）の質がモニタリングされてきた。幼稚園では、年次計画及び教育活動の評価も行われている。

現在、政策や保育者養成、現職研修にとって必要な要素を考えるという目的で、全国統一のモニタリング制度の準備を進めているところである。

■デンマーク

デンマークでは、2007年度から教育内容の質に関する情報を自治体が公表することが法制化された。モニタリングしているのは、「人格発達」「社会的能力」「言語発達」「身体と運動」「自然及び自然現象に関する知識」「文化的価値と芸術（アート）表現」の6領域。面接や観察、質問紙調査、インタビューなどによるデータが収集される。

また、言語発達についてはストーリーテリングの手法も使われている。

◎幼児教育の質についてのデータを日本でも収集すべきではないか

前節で見たように、海外のさまざまな国で幼児教育の研究データを蓄積し、分析するようになっている。一方、日本にはまだ、子どもの園での育ちに関する大規模な縦断研究データがないのが現状である。

もちろん、国によって事情は異なるから、日本も海外に倣って実施すべきだとは言えない。また、子ども1人ひとりの存在価値はデータだけに落とし込めないことも、言うまでもない。

ただ、最初に述べたように、日本の幼児教育にも課題はあり、私は考えている。全ての子どもに幸せな人生を保証できるように、幼児教育のあり方を改めて見直し、幼児教育を通して子どものどのような力を伸ばすか、そのために保育者は何をすべきかなどを検討してもよいだろう。そして、日本の幼児教育の質に関するデータを集め、質を保証する方法を考えていくことも、グローバル化の中で必要になるのではないだろうか。

1-2 パネルディスカッション

日本における保育の課題と展望

panel discussion

第1部 問題提起

～日本におけるECECの課題～



榊原洋一
CRN所長・お茶の水女子大学大学院教授

日本の 幼児教育の 課題と展望

第1回ECEC研究会の最後に行われたパネルディスカッションは、3部からなる。第1部は榊原洋一氏による、日本の幼児教育についての問題提起。第2部はベネッセ教育総合研究所の後藤憲子主任研究員による、「第2回幼児教育・保育についての基本調査」についての報告。第3部は、上記2名に秋田喜代美先生、一見真理子先生、大豆生田啓友先生を加えた5名による総合討論である。

私は小児科医であるが、これまで多くの保育士や幼稚園教諭の方々と仕事を共にしてきた。その経験から、パネルディスカッションのための問題提起として、現在の日本におけるECECの課題を以下の5つにまとめてみた。——
表①参照

1つ目は、「日本の保育・幼稚園教育は、世界の中でどのような位置にあるのか？」ということだ。日本の幼児教育で世界に誇れることは何であり、逆に足りないことは何なのか？ と言い換えることもできる。

2つ目は、「そもそも日本の保育・幼児教育の全体像は明らかになっているのか？」である。日本では、幼児教育の「代表的」「標準的」「平均的」な保育所・幼稚園を挙げることができるのか？ という問題提起をしてみたい。

3つ目は、「保育の質を測定する基準（ものさし、measure）は何か？」ということだ。別の言い方をすると、「高い幼児教育の質」とは何か？ どのような条件を満たせば、それは質の高い幼児

教育といえるのか？ということを考える必要があるだろう。

4つ目としては、「保育の質を高めるためには、何がなされなければならないのか？」ということが挙げられる。これは、理念や精神論ではなく、どのようなことをしなければならないのか、具体的に考えていく必要があるだろう。

5つ目は、前の4つとは少し趣旨が

異なるが、「保育所と幼稚園で行われている幼児教育の内容の本質的な差は何か？」ということだ。幼保一元化を進めるためには、保育者の教育内容ではなく、実際に行われている活動の差が何か？ということを考える必要があるだろう。

こうした課題について、保育所と幼稚園の先生方に伺ってみたい。

表①

日本におけるECECの5つの課題

- 課題1 日本の保育・幼稚園教育は、世界の中でどのような位置にあるのか？
- 課題2 そもそも日本の保育・幼児教育の全体像は明らかになっているのか？
- 課題3 保育の質を測定する基準（ものさし、measure）は何か？
- 課題4 保育の質を高めるためには、何がなされなければならないのか？
- 課題5 保育所と幼稚園で行われている保育内容の本質的な差は何か？

第2部

調査データから見る日本の保育

～「第2回 幼児教育・保育についての基本調査」より～



後藤 恵子
ベネッセ教育総合研究所
次世代育成研究室室長

基本的な生活習慣に 重点が置かれている

現在、幼稚園と保育所が制度改革の時期を迎え、非常に大きく変わろうとしている。我々も民間のシンクタンクとして調査データを提供することでより良い保育環境づくりに貢献できればと考え、2012年度に幼児教育・保育についての2回目の調査を行った。

調査のテーマは、園の教育・保育活動、子育て支援活動、園の体制などの実態と、回答した園長の意識である。園児数が30人以上の国公立幼稚園、認可

panel discussion

保育所、認定こども園の園長または施設長を対象に、郵送による自記式アンケートで行った。—図①—この調査結果の中から、今回のパネルディスカッションのテーマにかかわるいくつかのデータを紹介したい。

図②は、「教育・保育目標として特に重視していること」を16項目の中から3つ選んでいただいたものだ。幼稚園、保育所ともに1位が「基本的な生活習慣を身につけること」、2位が「健康な体をつくること」だった。3位は幼稚園では「友だちを大切にし、仲良く協力すること」、保育所では「人への思いやりを持つこと」が挙がったが、他者との関係を大切にするという点では、相似している。1位、2位に関しては、幼稚園教育要領の改定の際に、「健康」の領域で心身の健康や運動の充実、食育、生活習慣に関する指導などの項目が付け加えられたことが影響しているのではないかと考えている。

一方、日本の幼児教育が大切にしてきた、遊びの中でさまざまなものに興味を持ったり、伸び伸びと遊んだりするといった点は、あまり上位に来ていなかった。これは、私自身の所感としては意外であった。

保育者の確保と質の維持が課題

図③は、教育課程・保育課程の編成について尋ねたものだ。ほとんどの園が編成しており、指導計画も作成していた。しかし、毎年見直しをしているかどうかという点で、多少違いが出るという結果であった。

また、保育者の免許・資格保有状況だが、幼稚園教諭と保育士の両方の免許を持っている人は、幼稚園では75.6%、保育所で81.6%と、保育所の方が少し多い結果となった。この背景

には、公立では幼稚園と保育所の職員の人事交流を推し進めていることがあり、ここ10年ほど、行政が両方の免許の取得を求めてきたということや、幼保一元化の流れがある。

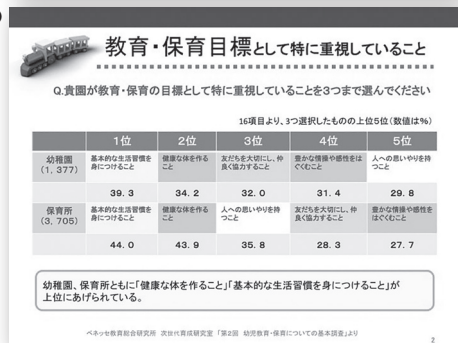
学生にとっては、幼稚園、保育所のどちらにも就職できるというメリットがあるが、一方で履修科目が増え、学生が忙しくなったにもかかわらず、実践的な知識やスキルを身につける機会がなかなか得られないという課題もあるようだ。

図④は、保育者の雇用形態である。非正規の保育者は、公立の方が多いという結果であった。その理由としては、自治体の財政難が考えられるだろう。延長保育や早朝保育、預かり保育で保育の時間が長くなった部分を、非正規の保育者が担っているという幼稚園や保育所も多いようだ。非正規の職員は研修を受けにくいという現状もあり、保育者としてのスキルを磨く機会が少ないことも課題だ。

図①



図②



また、図⑥を見てもわかるように、開園時間の長時間化で、園での研修の機会がなかなかつくりにくいという現状もあるようだ。

図⑥は、園運営上の課題について、22項目の中から最も重要な課題だと思ふものを1つ選んでいただいたものである。私立幼稚園を除き、「保育者の資質の維持、向上」がどこの園でも第1位に挙げられている。「保育者の確保」も公営保育所、私営保育所で第2位となっていた。量的な業務の拡大にスタッフの確保が追いついていない、スタッフを確保できても保育者の質をいかに維持するかという点に課題があるのではないかと推測できる。

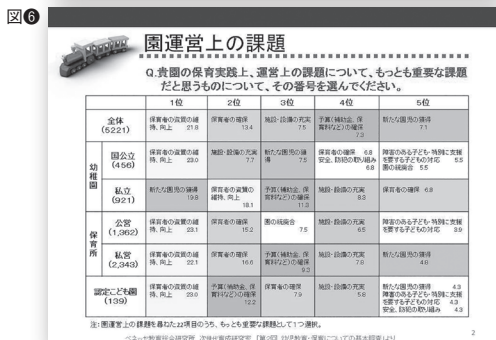
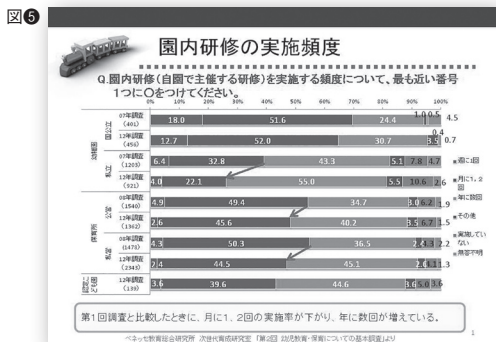
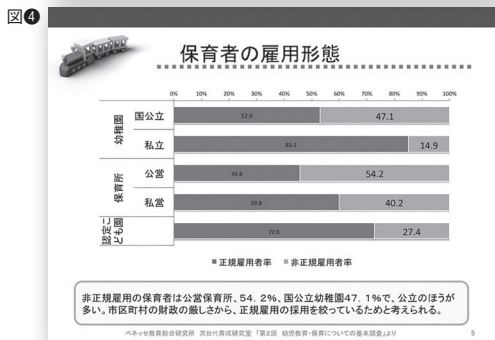
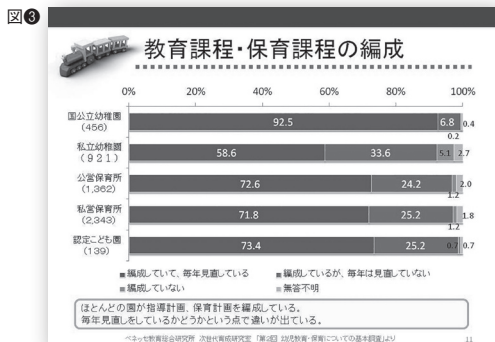
養成課程の教育内容の充実も求められている

図⑦は、保育者の資質向上のために必要なことについて、27項目の中から必

要だと思ふ項目すべてに丸をつけていただいたものだ。私立幼稚園、私営保育所、認定こども園では「保育者の給与面での待遇改善」が第1位に挙げられた。公営保育所では「職員配置基準の改善」が第1位であった。

「養成課程の教育内容の充実」が、幼稚園・保育所、公立・私立の別にかかわらず上位に挙がってきていることにも注目したい。なぜ養成課程の教育内容が課題になっているかを考える必要があるだろう。

図⑧は、私立幼稚園と私営保育所を対象に、認定こども園への移行を考えているかどうかについて聞いたものだ。私立幼稚園の36%が条件によっては移行してもよいと回答していた。その条件としては、施設整備費の保証、職員配置基準を満たすための人件費の保証、会計処理や申請手続きなどの事務手続きの簡素化や一本化などが挙げられていた。

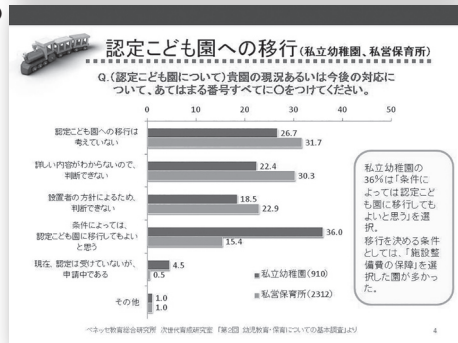


今回ご紹介した調査結果は、幼稚園、保育所の実態の一部を示したものであるが、今後、議論を進めるための参考にしていただければと考えている。

図7



図8



第3部 総合討論

panel discussion

司会● 榊原洋一 Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授

パネリスト●

秋田喜代美 Akita Kiyomi …………… 東京大学大学院教授

後藤憲子 Goto Noriko …………… ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室室長

一見真理子 Ichimi Mariko …………… 国立教育政策研究所総括研究官

大豆生田啓友 Omameuda Hiroto …………… 玉川大学准教授

※所属・肩書きは発表当時2013年6月30日のもの

日本の幼児教育に どのような課題があるか

榊原● 本日はよろしくお願いたします。まずは、ECECの課題について、お一人ずつコメントをお願いします。

一見● 本日はこのような席に立たせていただき、ありがとうございます。私自身は、もともと幼児教育の専門ではあり



ませんが、ユネスコを通じた国際協力のセクションにおりましたので、海外の方々を日本の幼児教育の現場にご案内する機会が多くありました。また、ベネッセのアジア地域の5都市の幼児の生活や子育てに関する比較調査にかかわるなど、日本とそれ以外の国の幼児教育のあり方を比較する機会が多かったので、そうした立ち位置から発言させていただきます。

まず、日本の幼児教育と、他のアジアの国の幼児教育は、かなり異なった特徴があるということを感じています。保育に対する期待は、日本以外のアジア地域では遊びを通して知的に発達する、激しい競争社会を生き抜く力を身につけることにあり、一方、日本では子どもの自発的な遊びを通して社会性を身につけたり、友だちや集団の意識を大切にしたりすることが求められているように思います。どちらが優れているかの結論を出そうとすること自体も、それがなぜなのかを考えることは、興味深いことです。

また、日本の幼児教育には遊びを重視する素晴らしい伝統がありますが、それが果たして日本の幼児教育の典型といていかどうかは議論を深める必要があると思っています。なぜならば、幼児教育の質の保証を考えるときに、どこでどういう幼児教育が行われているかをマッピングしておくこと、実態を把握しておくことが、非常に大切になってくるからです。



国際的にもエビデンスに基づく制度改革が当たり前になってきており、きちんとデータを揃えたうえで、予算を政府に請求していくことが重要になっていますが、秋田先生もおっしゃったように、日本はその点が比較的遅れています。今回、秋田先生が日本のデータを初めてOECDに提供したとき、保育者の待遇や子どもと保育者の比率などの指標が必ずしも芳しくないということが明らかになりました。これをテコにして、予算措置を要求できる段階には入りましたが、震災や政権の不安定さなどさまざまな事情があり、就学前教育に公的な予算を十分に呼び込めないという状況です。ともあれ今後は、行政側が一元的にデータを収集するなどの体制作りが必要です。

大豆生田 ● 本日はよろしくお願ひします。私は、普段幼稚園や保育所の現場を見ることや、保護者との接点も多いのでこうしたスタンスからお話をさせていただきます。

本日、幼児教育の質保証に関してのデータをもつことの大切さについて、秋田先生がお話されていました。最近、子どもの運動能力に関しての調査が行われましたが、その結果は特に幼児教育の世界には大きなメッセージであったと思います。自由に遊ぶことと運動能力との関連や、園庭の有無との関係性など、ある程度の規模をもったエビデンスが出てきて、現場にも反映されました。データを揃えることの重要性を痛感しました。

また、先ほど後藤さんが報告されたベネッセの調査からは、園が、保育者の問題を非常に大きな課題として捉えていることがわかりました。これは、多くの現場を訪れる中で、私も実感していることです。

保育者の問題を解決してために、養成課程の充実の必要性を感じている園が多くありましたが、養成カリキュラムの問題なのか、生活習慣も含めてもったき

ちんと教育せよということなのか、どのレベルのことを求めているのか、知りたいと思っています。

秋田● 私は、今日は国という大きな視点から、スタンダードというもののあり方についてお話をさせていただきました。しかし一方で、それだけでいいのかとも考えています。むしろ、各園の文化、地域の文化、その固有性で考えるのが実践者の立場ではないかと。幼児教育は多様であり、その多様性の中で、それぞれが誇りを持って質を向上させていくということでしか、幼児教育の質を上げていくものはできないとも考えています。

だからこそ、それぞれの園の誇りを得るためにも自園は何が特徴的なのかを知ることが大事ではないかと考えています。

幼児教育の質をどう考え、どう高めていくのか

榊原● 幼児教育の質をどう見るかというのは非常に難しい問題がありますね。

一見● OECDで理想とする保育者像の一つとして、ヨーロッパのソーシャルペダゴーク（社会教育士）が挙げられています。専門性が高く、待遇面でも小学校教諭と同等以上で、キャリアも長く、社会、家庭、幼児教育の三者の橋渡しができる専門家です。質保証のネックは、子どもとかかわる大人の力量にかかっていると思いますので、そこに関しての議論が今日も必要だと思われれます。

また、ECECに関する国際的な会議に、日本から参加できる人材がなかなかいないという課題もあると思っています。こうした会議では、保育情報のIT化の促進などがはかられつつありますが、こうした会議に参加できるような、なるべく見晴らしのいい立ち位置にある人材を育成することが必要です。そのためには、省庁の一体化・一本化は不可欠です。



大豆生田啓友
玉川大学准教授

大豆生田● 先ほどの秋田先生のお話にもありましたように、幼児教育の質を考えるには、「スタンダードは何か」を考える国レベルの大きな観点と、「個々の園レベル」という両面から議論を進めることが大切なのだと思います。

ただ、「幼児教育の多様性」というのが、まるっきり多様なのか、それともある程度の共通性があった上での多様なのかを考えることも、一つの鍵になるのかなと思いました。

秋田● 大豆生田先生、的を射た指摘ありがとうございます。私自身は、すべての子どもに保証する質のレベルを上げるのが国や公共の仕事で、そのレベル以上のことは、個々の園の対応であると考えています。各園が学び続けてさらによくなっていくというプロセスにこそ、意味を見いだしたいのです。

そのための鍵は保育者が握っていると、先ほどからの議論で出ていますが、その中でも重要なのは、園長や施設長です。それぞれの先生の力を十分に発揮させ、足りないところを補い合いながら、質を高めていくという「園としての有能さ」を議論していくことが大切ではないでしょうか。

後藤● 私自身も今回の調査を行いながら、現場で起こっている問題を解決していくことが大切ではありますが、そのためにも、幼児教育の質を上げるには大きな観点からも考える必要があり、そこを



秋田喜代美
東京大学大学院教授

どう結びつけていくかが大切だということ
を改めて感じました。

また、先ほど一見先生から、遊びの中
で学ぶのが日本の幼児教育のスタンダード
だといわれているが、実態とはズレが
あるのではないかというお話がありました。
今、現場の先生方にお話を聞くと、
保護者のニーズにどう応えていくかとい
う点に課題を感じているという意見がと
ても多く出てきます。このことが、ズレ
の原因の一つとして考えられるのではな
いでしょうか。

秋田先生の講演で、コミュニティの中
で幼児教育の質を考えていくという諸外
国の例が挙がっていましたが、先生や保
護者だけでなく、コミュニティ全体で子
どもに必要な幼児教育とは何かを考えて
いくことが、一つの新たな視点として考
えられるのではないかと思います。

養成校が抱える 課題について

榊原● 先ほど、養成校を充実させるこ
との必要性が出てきましたが、これにつ
いて、後藤さん、大豆生田先生からもう
少しコメントをいただけますか？

後藤● この調査を行ったとき、必要だ
と思うことに○をつけてもらうと同時
に、なぜそう思うのかも書いていただい

ています。例えば、「保育者となる人た
ち自身に生活の実体験が不足している」
「幼保両方の免許を取るのに忙しく、実
践的なスキルのトレーニングをする機会
が不足している」などのご指摘がありま
した。

一方で、特別支援の子どもたちをどう
見ていくか、問題を抱えている保護者へ
のカウンセリングも必要など、社会から
の要求レベルが非常に高まっています。
そのため、養成校の課題だと一言で片付
けてしまうのではなく、何が具体的に課
題で、どのような対応が必要なのかを、
一つひとつ分解して、考えていくことが
必要ではないかと思っています。

大豆生田● 確かに、実体験を養成課程
の中にどう組み込むかという課題はある
と思っています。私が所属している玉川
大学では、1、2年生で現場に出る体験
を増やすために、インターンシップを充
実させ、カリキュラム改革を行いました。

ただ、実体験の中身として何が必要か
ということになると少し議論が必要かも
しれません。

榊原● 秋田先生、保育学会長として、
今の養成校への期待などがございましたら、
コメントをお願いします。

秋田● まず、保育士と幼稚園教諭の両
方の免許を取る必要があるために、実体
験が不足するという課題、これはやはり
保育士と幼稚園教諭の資格や養成課程を
いずれいつかは一本化することが大切だ
と考えています。一本化されたカリキュ

ラムの中で、さまざまな特徴をもつ園で豊富な実体験をして、実践力を高めてほしい。非常に難しいことであり、夢でもあります。あえて申し上げたいと思います。

また、個々の保育者の質を上げるという観点では、ある程度実践を積んだあとに、さらに専門性を深めるための基準や資格をつくり、そのための研修を行うということも考えられると思います。例えば、カナダには専門性基準があり、新人が最低限身につけておく基準と、ある程度現場で実践経験を積んだ保育者がさらに専門性を高めるための基準があります。こうした基準を決める職能団体があり、保育者同士がお互いの経験やノウハウを提供し、共通で活用できるデータベースをつくったり、研修をしたりしています。

会場とパネリストとの 質疑応答

榊原● ここからは、会場の皆様からご質問をいただきたいと思います。

Q1 八王子で園長をしています。今、幼児教育の現場は、「一刻も早く、人とお金をください」というような、かなり切羽詰まった状況です。そのためにも、早く政治家を動かす物差しが日本でつく



一見真理子

れないかと思っています。海外との比較ではなく、現状として日本の子どもの育ちが大変なんだということを国にも深刻に考えてもらいたい。しかし、その大変さを証明できるデータがないという状態です。実際に目の前の子どもや家族を見ているだけで、状況の大変さは伝わってくるので、今の子どもたちの未来をつくるためにも、国の支援を整えていく必要があると思いました。

秋田● 先生が言われたような本当に困難な状況は、よく理解しています。その状況を打開するためにも、保護者や地域の参画によって質を上げていくことが大切だと考えています。園の活動が地域に開かれることによって、例えば、その地域の政治や行政官が、状況を理解していく。このことは、一つのエビデンスになると思います。

数値だけがデータではありません。園がコミュニティの中で抱えている課題を、いろいろな人に参画してもらいながら共有し、対話していく。また、課題だけではなく、質の高い幼児教育をすれば、それだけ子どもが成長していくという事実・エピソードも伝えていく必要があります。その対話というものが、多様性を保証しながら、質を上げていくということにつながるのではないのでしょうか。

一見● 韓国が、OECDの勧告を受けて、ECECにかかわる専門家を集めた、データ共有や一元化のための専門機関を早々と設立しました。日本でも、実践の現場や養成校とリンクして、きめの細かなレベルまでのデータが作成できる機関の設立が本当に待たれると思います。

Q2 横須賀から参加しました。お話を聞いていて、幼児教育の質ということと、保育者の質とは連動していると思いました。先ほど、養成校の課題についてお話がありましたが、現場を見ていますと、遊びを豊かにしていこうというときに、

子どもが遊んでいる瞬間、どういう言葉がけをするかが非常に大切になってきます。しかしどうしても、保育者個人に関わる問題になってしまいます。保育者の質が、子どもを豊かにするか、しばませてしまうかに大きく影響してしまうのです。

養成校では、「遊び」という科目はありません。夢中で遊んで、その遊びをどう展開したらおもしろいかといったことを、今の学生さんは生活体験として持っていない。だから、子どもにも伝えられない。そこに、大きなポイントがあるのではないかと考えています。

大豆生田● 先生がおっしゃられたこと、私は賛成です。今の若い世代は、遊び込むという経験が非常に減っています。私も授業では、例えば泥だんごを作ってみるなど、「子どもになってみて、学ぶ」ということを大事にしています。

ただ、それを個人の問題だと言ってしまうと、限界があります。それぞれの保育者なりのあり方を、園の中でつくっていくことも大切だと思っています。

幼児教育の質を高めるためにこれからできることは何か

榊原● パネリストの先生方、最後に一言ずつお願いします。

秋田● 外を鏡にして、自園や自国を振り返ってみると、良いところが見えてく

るといことは多くあると思います。子どもと一緒に、日本の文化や良さを大切にしたいという心が必要だろうと思いました。

一見● 日本の幼児教育の質の良さを、いろいろな条件が整わないために落としてしまうことのないように、政治家も巻き込みながら訴え続けていくことが大事だと思いました。また、世論でムードを誘導していくことも効果的だと思います。例えば、日本での幼稚園や保育所のエピソードをたくさん集めて、宮藤官九郎さんのような方にシナリオを書いていただき、朝の連続ドラマにしているかどうかなど考えていました。(笑)

大豆生田● 一見先生が、日本は幼児教育に夢を描く傾向が高いと話されていて、この視点はとても大事なことだと思います。幼児教育に夢が描けるかということの中に、幼児教育が良くなっていく要素が多く含まれていると思います。夢が描ける状況をどうつくっていくのが、エビデンスを揃えることと並んで大切なことだと思います。

後藤● 一見先生のドラマ化の話、私も大賛成です。そういうところで具体的な事例や、こんなことが行われているんだということ、世の中の方に伝えていくことも必要なのかなと思いました。

また、調査をしていると、ネガティブなことが出てきやすいのですが、調査の中では、認定こども園になったことの良さもたくさん挙がってきています。ニュースでは、保育所が足りないことばかりが取り上げられてしまっていますが、ポジティブな回答も伝えていきたい、良いニュースも伝えられる調査をしていきたいと思いました。

榊原● 本日は長い時間、ありがとうございました。

